
俺の人生はとあるデスゲームでかわったっ！

絶英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の人生はとあるデスゲームでかわったっ！

【Nコード】

N2432BA

【作者名】

絶英

【あらすじ】

とても最悪な人生を送った木田徹は静岡に移り住み平凡な毎日を送っていた。そんな時、仮想体感型MMORPG《Lost online》が開発された。俺は早速Tに応募し抽選で選ばれる。テストが終わった後正式サービスが始まるが仮想空間に移動する機械《Guranderu》は俺たちテスター分合わせて1万個しか作られなかったらしい。不思議に思いながらも正式サービスという嬉しさに全身を震わせログインするがその直後から俺たちのデスゲームは始まっていた。ログアウトできない、そして

ゲーム内での死は現実の死と同様という何とも恐ろしい仕様であった。脱出するにはゲーム内の舞台となるブロード大陸を攻略しデスタウンと言う最後の街を攻略することであった。俺は攻略に向けて歩き出すのであった。そしてそこで待つ新たな仲間とともに戦い新しい人生を見つけるのであった。

よくあるログアウト不可のデスゲームです。あまり慣れていないですがどうぞ見てください。誤字脱字おかしな点がありましたら報告ください。後感想待ってます。よろしくお願いします。

1 (前書き)

MMORPG系はまだ書いたことがないです。
いろんな場所で小説書いてますが初挑戦ですっ
頑張ります
見てくださいつ

俺の人生は……最悪な物だった。

俺の母さんと父さんはとても仲が悪かった。毎日喧嘩をし母さんを一方的に殴り蹴り……。そんな毎日を妹と一緒に見てきた。

俺が小学校3年で妹が小学校1年だった時

ある日電話がかかってきた。父さんの友人からだった。

内容は父さんが麻薬密売人として警察に逮捕されたというものであった。その時、俺のガラスのようにうつすぺらい人生にヒビが入ったのだった。

俺たち家族は近所から軽蔑の視線を浴びせられた。

学校でも同じだ。俺の机は黒の油性ペンで塗りつぶされ、黒板には「死ぬ」や「消える」と書かれ、それに気づく先生も誰も止めようとはしなかった。

辛い毎日を過ごしていた。だが妹もその気持ちは一緒だと思っていると俺が守ってやりたいという気持ちにもなれた。

俺が中学校1年で妹が小学校5年の時

父さんが帰ってきた。話を聞くと刑務所から脱獄してきた。外国の方に高飛びするから金を貸せというのだ。これには俺も妹も母さんも呆れた。それと同時に怒りが込み上げてきた。家族をこんなに不幸にし拳句の果てに金を貸せだと、謝る気持ち一つもない。

父さんは早く出せよ、と催促する。

いきなり母さんがキッチンに向かって走って行った。何をするかと母さんの方を向くと母さんは包丁を手に持ち「出ていって！」と強い口調で言うのだ。

父さんは怒りに満ち溢れた表情で母さんの方に歩いていき包丁を奪おうとする。母さんはぶんぶん包丁を振り近づけないようにす

るがバツと飛び掛かられ押し倒されてしまう。

包丁を奪われそうになり必死に抵抗する母さんと包丁を奪おうとする父さん。その勢いにより周りの物がガンガンと床に落ちる。

このままだと母さんが殺されてしまう……。その後は俺らも……。勿論妹も……。

俺は父さんにとびびかかろうと椅子から立ち上がろうとしたその時。

グサツ！！

ぐああああ！！ と叫び声を上げバタツと倒れる父さんを震えながら見る血だらけの母さん。

俺と妹は震えで身動き一つできなくなっていた。怖かった……。怖かった……。

終いには妹は泣きだしその場に崩れ落ちる。俺はどうすることもできずその場で立ち尽くしていた。そんな俺を見た母さんは走って俺の方に向かってき、血だらけの包丁を俺の手に持たせ返り血の付いた上着を脱ぎ手についた血を洗い流し妹の手を取り逃げ出した。

バタン！

玄関のドアが閉まる音がした。

これで俺は犯人にされたのだった。

周りは散らかった本、父さんの死体、その周りを囲むように広がる血だまり、母さんの上着。何の反応もできず手にする包丁をその場に落とし俺は泣き崩れた。

騒ぎに気付いた近所の方が通報したのか1時間後に警察がやってきた。初めはパトカー数台だったが次第に増えていった。

勿論その場にいた俺が犯人にされた。何の反論もすることなく俺はそれを受け止めた。妹と母さんが幸せに暮らせるならそれが何よりだったからだ。

俺は取り調べをされ嘘の事を言った。

その何日か後に俺は釈放された。事後捜査により母さんが犯人だということが分かったからだ。高飛びしようとしていた母さんは空港で身柄を拘束されこの事件は終わったのだった。

事件後俺は学校にも地域にも居られなくなった。毎日のように家に押し寄せてくる報道人。学校ではだれからも相手にされず苛めという段階を通り過ぎる程過度なことをされた。妹も同じだった。

だが我慢して俺が中3になるまでその地域に居た。辛かったが耐えた。

だがもう無理だった。

俺たちは別々に暮らすことにした。

俺は静岡の親戚の家、妹は東京の祖母ちゃんの家で暮らすことになった。

俺の親戚の家は超ド田舎と言える街だ。俺が暮らすには最適な所だ。

俺は野球好きで中学では一応野球部所属のピッチャーだったための丸坊主の頭から髪を伸ばしどう見ても根暗としか思われないうようにした。結構顔が良かった(自称)ので髪もそれに合わせて伸ばした。

俺は今黄桜高校に通い普通の学校生活を送っていた。髪をのばしたことが効果があり誰も俺の事には気づいていない。髪型とか雰囲気とかのおかげであだ名が「ネクラ」になってしまったが中学校に比べれば何の支障もない。楽しい生活だった。

あのゲームをするまでは……。

1 (後書き)

次回1作

誤字脱字あれば報告よろ

短すぎたああ

もっと長くするからねっ

2 (前書き)

今回は長くする予定(仮

黄桜高校に入学してから俺 きたとあ 木田徹は毎日平穏な日々を送っていた。新しい友達とキャッチボールとかしたり（野球部でない）日進月歩していくインターネットとかやったりとても楽しい毎日だった。まあ女子からはネクラと呼ばれるのには変わりないがな。

因みに俺の親戚は裕福で個人用のPCも買ってもらった。新型のPC「ZEX？」と言っらしい。それは「ウインWINDOドネスドネス」ドネスという会社が発売した物だ。そのPCはキーボードだけで画面がないのだ。キーボードの上部中央あたりから特殊な画像映し出されそれが画面の役割を担っている。マウスは無い。キーボードの右にタッチパネルがありそれを指で操作することでマウスの役割を担っている。インターネットも今の時代ではどこでも繋げる。それにコンセントも不要ということで学校にも持っていける。俺としては超嬉しいものであった。

俺の友達も同じものを持っており自習になり先生がいないときとかになったらいつもオンラインゲームとかチャットとかして遊んでいる。

とても楽しく最高の毎日だった。

だが……

不安な気持ちもあった。

あの日がまた蘇ったらどうしようか……。学校に俺の事がばれたらどうしようか……。それで高校を中退になったらどうしようか……。そうしたら今の仲間は……。……。

毎日不安は頭の中をよぎった。

明るい顔をしていても怖く苦しくなきたくなるほどだった。

吉田真一よしだしんいちが寄ってきた。その後からPC仲間が数人寄ってきた。

「で、どうしたんだ？」

俺は問いかけた。

「ゲームニュース速報ってところに大きく張り出されているやつあるだろ？」

と、高田は言ってきた。

俺はキーボードの電源をONにし画面表示をONにした。その後ゲームニュース速報と言うものを調べ大きく張り出されているやつを発見した。そこには『仮想体感型MMORPGの開発に成功!!』とあった。なんなのだろう……？

「仮想体感型MMORPGってのは仮想空間に移動する機械《Guranderu》を使って仮想空間に移動して自分自身の脳で操作できるってやつなんだ。視覚、聴覚、嗅覚、感覚とか触感とかが立体的に再現してあつて現実の世界と殆ど変わらないんだ。ゲーム名は《Lost all online》。だがゲーム内容とかは分からないけどな」

「まあわかった。今の日本の技術ならばいつか出るだろうとは思ってた。けどな……俺が疑問なのはなんで哲也がそんなに詳しいのか……だ」

周囲のPC仲間も同じ事を聞きたかつたらしく「なんでだっ！」と叫んでいる。まあ中には仮想体感型MMORPGの開発成功の喜びで失神したのや「ギヤアアアアア！」と叫び狂っているやつら（吉田氏その他多数）もいるがそいつ等は無視しとことう。

「ああそれはな」

と俺のPCを強奪し隣の机に置きキーボードを打ち始めた。そしてカチツと一際大きいおとをたてた後俺の所に持ってきた。

「これが《Lost all online》の公式HPだ。で此処が仮想空間とかそこらへんの説明がある」

「なるほど……」

と俺はうなづいた。

「で、だな……！俺はこの《Lost all online》のテストに応募しようと思うんだ。お前も応募しないか？」

抽選で1000名と公式HPに書かれていた。かなり興味がある。「ああいいぞ……！俺も興味あるしな」

そう言った途端に周りの奴ら（暴れ狂っていた吉田氏その他多数と失神していたものも含む）も「俺も応募するぜっ！」とどこかの懸賞に燃えるオバサン連中のように声を張り上げてきた。

「じゃあ決まりだな！テストの抽選に選ばれたら一緒にやろうな！」

高田は言った。

「「「「「おお！」「」「」

俺らは声を合わせて言った。

やっちまった……。

テストに抽選で当たってしまった……。

俺はあの子の自習の時間に応募を済ませた。

当選者発表の日を数日待って当日の朝。そんなこともすっかり忘れあくびをしながらメールを確認していると『《Lost all online》テスト当選のお知らせ』という件名でメールが来ていた。

内容を要約するところだ。

木田様は《Lost all online》のテストに当選されました。おめでとございます。尚 テスタ ーの皆

様のみには《Guranderu》などの機器が後日宅配として届きます。ですがそれらは全て無料です。お間違いのないようよろしく願います。

尚この《Guranderu》は正式サービスの際にも使えますのでお使いください。

と……。

嬉しすぎて泣いちゃった。

今日学校行ったら自慢してやるっ……！

2 (後書き)

一 応次回1作(仮)

誤字脱字など感想募集中

3 (前書き)

おお！

お気に入り登録4件！！

みなさんありがとうございますっ！

更新はあまり早くないけど皆見てください
よろしく願います。

今回いければ2作書きますよ。

> 学校で自慢するところ < 深夜1作

> テスト(始まり) < 朝1作

あ、後……この小説をどんどんな所で広めていっ
てもらえるとうれしいです！

俺は陽気に朝食を貪り学校に走っていった。

出発時刻6時。到着までにかかる時間30分程。

少し早く出すぎただろうか………？

俺の登校はバスで学校近くまで行き歩いて学校に行くというものであった。

勿論いつもの俺なら朝遅く家を出て、ぎりぎりのバスに乗り走って学校に行くというのであった。が………陽気になりすぎて恐ろしい勢いで家を出てしまった。

起きるのは人一倍早い俺だがグダグダPCしていると遅くなるのが毎日であったが今日はメールを見た瞬間なぜか頭の中が自慢という文字でいっぱいであった。たぶん脳内メーカーで俺の名前を検索すると自慢の「慢」の字が埋め尽くしているだろう………。

俺が停留所に着きバスに乗るとそこは無人であった。生徒の中には自習とかしているやつらが朝早く着たりするが流石にこの時間にはいなかった。

どんだけ早く着たんだ俺………。

俺は席に座りながら苦笑した。

登下校の道には坂がありその坂が格段ときついのだ。下るのには角度が急すぎて危なすぎるため学校で全面的に禁止されており、上るのには角度が急すぎてとてもつらい。俺が遅刻して歩いて行く八メになったときは本当に辛かった。あの坂を乗り越え少し歩き学校に到着したときは、広大な砂漠でオアシスを発見したときのようなうれしさがこみ上げてきた。とにかく………本当に辛いのだ。

………！

その坂で俺は信じられない光景を目の当たりにした。

「真一……！！？」

俺のキャッチボール仲間でもありPC仲間でもあるその吉田真一が今、鬼の形相でチャリをこいでいた。真一は普段なら俺と同じくらしいの時間にバスで来るはずなのに……。なぜ真一が鬼の形相でチャリをこいでいるのかは全く分からなかった。鬼人の如く坂を駆け上がる真一の横を俺はバスで悠々と通過していった。

俺が学校についてから数分後に真一は到着した。

教室に入り俺の顔を見るなり真一は「死ね」と言ってきた。何なんだこいつ……。

「とりあえずさ……。何でお前がいるんだよ……。？」
真一が問いかけてきた。

「いや……。先にお前が言うべきだろ？ 何でこんな早く着たんだ？ しかもチャリで……。」

「なっ！ 見てたのかっ!？」

「ああ見てた。坂を鬼の形相で駆け上がっていたな。めちやくちや笑えたぞ」

「なっ……。！ 死ねやちくしょお!」

「いや無理だから……。」

と、まあこんな会話を続けて3分後。

「とりあえずさあ……。本題入ろうか……。」

なぜ早く着たのかが知りたくて話を打ち切った。というか完璧に本題からずれていたので打ち切るのが普通。

「ああそうだ……。徹……。驚くなよ……。」

驚かねえ。逆にお前が驚くハメになるだろうよ。

「えつとだな、グホオン!」

めちやくちやじれつたいなこいつ……。

「絶対驚くなよ……。？ だからなあ……。ゴッホ

ン！」

「ああ分かったから……驚かないから……。とりあえず喋れ。」

「だからなあ……グファン！」

「いい加減うざくなってきた。」

「えつとだなあ……実はなあ……。」

「おっ！　とうとう話してくれるか……!？」

「実は……ゴホン！」

「さつさと喋れや！」

「かなりうざかったので言ってやった。」

「ああ……すまんすまん。ちょっとじらしすぎた」

「じらしすぎだろ！」

「実はな、今朝起きてメールを見てみたんだ。するとな……。」

「。何と　テストに当選したっていうメールが届いてましたあ!!」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「何……だと……もう一度言ってくれ」

「だーから！　テストに当選しましたあ!!」

「何だとお!!　かなり驚きだ。あれだけ驚かないと思っていながら……。というか俺のネタが……。しょうがないな。話すしかないな。」

「実はな……俺も当選してたんだよ。　テスト」

「何だとお!？」

「つてことは俺達一緒に遊べんじゃん！　ラッキーじゃんか!」

「真一は満面の笑みを浮かべながらそう言った。」

「俺も気を取り直し「ああ!」と言った。」

その後一般生徒の登校時間になると続々と人が登校してきた。

俺らが一番乗りつてことに驚く奴らもいればガン無視で登校してくる奴もいる(女子)。

登校してくる奴の中に混じるPC仲間がどんどん集まってきて当

選したか報告しあった。

結果俺達だけが当選したことが分かった。

その後授業は嬉しさで頭がいっぱいになり全く入らず、自習でもPCをつけたまま何もせず隣の女子を見つめ微笑んでいたらしい。全く覚えていない。自習の時間であだ名が「ネクラ」から「ヘンタイ」へと進化した。

3 (後書き)

誤字脱字等ありましたら指摘よろしくお願ひします。
感想 and 評価お待ちしております！

自習は黄桜では毎日1時間あることになっています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2432ba/>

俺の人生はとあるデスゲームでかわったっ！

2012年1月9日02時51分発行